法華経と福音書の譬え話に関する考察

柳沼正広 訳ジラ

謝申し上げます。
はじめに、ここフランスでの仏教経典展開催に尽力してくださったフランス創価文化協会と東京の東方とでいと思います。また、法華経と福音書におけ上げたいと思います。また、法華経と福音書におけ上げたいと思います。また、法華経と福音書におけ上げたいと思います。また、法華経と福音書における譬えるために、主催者は対話の精神に基づいて、私を招待してくださいました。このことに対しても感を招待してくださいました。このことに対しても感謝申し上げます。

てすでに多くが語られてきた二つの譬え話に注目しこの短い発表で私は、仏教とキリスト教の伝統にお

とルカによる福音書の「放蕩息子」の譬喩で意図しているのは、両者の間の直接的な関係を証明で意図しているのは、両者の間の直接的な関係を証明することではありません。それは大変に危険なことで相違点を示すことによって、何が自分の対話の相手を相違点を示すことによって、何が自分の対話の相手をあざせているのかを知り、そのことを通して、私たちが皆、自らの伝統に立ち返って自己理解をさらに深めていくことを目指しているのです。

は

通常の思量・分別では理解することはできな

譬え話を用いる目的

1

ダが述べている場面です。で、悟りを得た者はどのように教えるかについてブッで、悟りを得た者はどのように教えるかについてブッ述べているか見ていきましょう。まず法華経の第二章するために、この文学技法について、それぞれがどうするために、この二つのテクストにおける譬え話の重要性を理解

って、多くの法を説いてきたからである。この法は、多くの法を説いてきたからである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 舎利弗よ、ただ一度だけ現れるようなものである。 ところは虚妄ではない。 舎利弗よ、多くの法を説いてきたからである。この法しは無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもしは無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもしは無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもしば無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもしば無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもしば無数の方便と、種々の因縁と

世に出現するということである」
世に出現するからである。舎利弗よ、多くの仏・世尊は、ただ一つの大事な因縁のゆえに世に出現するからである。舎利弗よ、多くの仏・世尊は、ただ一つの大事な因縁のゆえに世に出現世尊は、衆生たちに仏の智慧を開かせ、清浄になることができるようにさせようと欲するゆえに、のとができるようにさせようと欲するゆえに、いっこれを知るのはただ仏のみである。なぜなら、いっこれを知るのはただ仏のみである。なぜなら、いっこれを知るのはただ仏のみである。なぜなら、いっことができるようにさせようと欲する。

悟り 念や分別があるゆえに」とあります。ブッダは には、 うに説くのです。また、ブッダが真実をすべて明らか ほど自身の教えを人々の性格や能力に合わせて説いて で何度も繰り返され、ほとんどの場合、ブッダがどれ にする第十六章 いるかを示しています。彼は、人々を「最高の完全な って、多くの法を説いてきた」との句は、 (阿耨多羅三藐三菩提)」に向かわせるためにこのよ 種々の性質、 (寿量品) を見ると、「多くの衆生たち 種々の欲望、 種々の行、 法華経の中 種 一多く 0) 想

この「無数の方便と、

種々の因縁と譬喩と言葉をも

段を用いるのです。 の善根を生ぜしめようとして」譬え話や他の巧みな手

ます。 タイでは、キリストはこの問題に次のように答えてい はマタイとマルコから三つ引用するにとどめます。マ ストが譬喩を用いる理由を説明していますが、ここで

マタイ、マルコ、ルカそれぞれによる福音書はキリ(5)

彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心 り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、 るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍 なたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見 ある。イザヤの預言は、彼らによって実現した。「あ ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからで で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいや だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見

> ことを告げる。」 てたとえを用い、 ことが実現するためであった。「わたしは口を開い なかった。それは、預言者を通して言われてい 群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られ イエスはこれらのことをみな、たとえを用 天地創造の時から隠されていた

めに語った一連の譬喩を紹介した後で次のように書い そして、マルコはキリストが「神の国」を教えるた

ています。

はひそかにすべてを説明された。 (9) ずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちに 多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用い イエスは、人々の聞く力に応じて、このように

表現できない真理を他者に伝えようとするときにブッ これらの引用の意味をよりよく把握するためには、 しさを認めていたのです。(10) とであって、そこには文字もなく、ことばもなく、心 りません。ブッダは、表現できないことを言い表すた ダとキリストが直面したジレンマを考慮しなければな がはたらくこともない」と述べたとき、この沈黙の正 象徴する文殊菩薩が「これこそ菩薩が不二にはいるこ 沈黙のみが真理を響き渡らせるのです。仏教の智慧を ません。維摩詰(ヴィマラキールティ)の沈黙は「維摩の を用いますが、 めに、教えの中で涅槃、空、仏性、不二といった言葉 雷のごとし」と言われていますが、このような 究極的にはどれも十分なものではあ

はっきり見られます。

は人々に思わせなかったことです。 ために用いた言葉とその実在そのものが同じであると くと決めたとき、彼が人々を究極的な実在に近づける ブッダの沈黙については多くのことが書かれていま 私たちにとって重要なことは、ブッダが教えを説

そうとするよりも、 要であった理由です。表現できないことを直接言い表 これが、彼と彼の教えを聞く人々にとって譬喩が 自然や日常生活から引き出される 重

> このことは、法華経の七つの譬喩のどれにおいても、 人々が徐々に近づけるようにしてくれるものなのです。 過剰なまでの言葉の豊かさによって、自身を超えたも らせるのです。私たちが知るかぎり、譬喩はおそらく、 実在に対してより大きく開かせ、ついにはその中へ入 譬喩を用いるほうが、 (12) の、自身の知らないもの、あるいは隠されているものに、 説法を聞こうとする人々をこの

ら な い ^[5] 息子の栄光の片鱗を見せた』あの変容の直後の、(4) トが、 キリストも沈黙についてよく知っていました。キリス から復活するまで、今見たことをだれにも話してはな たちに対するキリストの命令です。「人の子が死者の中 してください。最もわかりやすい例は、 について何を語ることができるというのでしょうか。 へと招かれていると説きました。しかし、神やその命 キリストはといえば、 他の者に沈黙を命じたあらゆる場面を思い起こ 彼はすべての人が神自身の命 神が ″自身の 弟子

知

福音書における譬喩は

、人々の聞く力に応じて√、

ことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼 放性が失われたとき、「耳は遠くなり、目は閉じてしま これらの譬喩を実際に聞くことによって、人々は、彼 地創造の時から隠されていたこと、であってもです。 速さで進むことを助けたのです。たとえその真理が、天 られざる真理のより深き理解へと、彼らがそれぞれ った。こうして、彼らは目で見ることなく、 かに〟受けられるまでになったのです。しかしこの開 なった人々は、キリストから、すべての説明を〝ひそ の弟子〟になりたいとさえ願えるようになり、 耳で聞く 弟子と 0

部外者には謎のままであるという事態になるわけです。 の人々には、とくにキリストに対して開かれていない るために用いられることになってしまいました。こう 人々にとっては、 要するに、 ある人々が聞き入れて理解できる譬喩でも、他 ブッダとキリストが譬喩を用いたのは、 同じ譬喩も、 かえって真理を曇らせ ″真理

らをいやさない」との預言者イザヤの言葉に該当する

までは想像すらできなかったより深い真理へと開 と呼びかけるものであり、 すべての人に、 譬喩とは、その も伝えようとした努力の表れともいえます。 の信仰の深さと内面の特性に合わせながら、 また、自身がつかんだ真理をすべての人に、それぞれ るものなのです。 、過剰なまでの言葉の豊かさ、によって、 自分の現状を打破して内面を変革せよ そのような変革を経験する 何として つまり、 かか

拒 法華経の会座では、出家修行者と在家信徒の区別にか 受け入れることが難しいということを示しています。 を聞きながら、 る機会をすべての人に与えるという教えを聞くことを かわらず五千人もの男女が、、最高の完全な悟り、 うことを拒否した人の存在は、こうした変化はどれも リストの道を進むこともできません。これらの師に従 この変化なくしては、 んで退席しました。またキリストにも、 彼に背を向けただけの人が多くいま ブッダの道を進むことも、 彼の譬え話 キ

の深さ、と彼らが自覚した、それを語ることの困難さ、

なによりもそれぞれの枠組みの中で体験された

との間にある隔たりのためであったと言えるでしょう。

[長者窮子の譬喩]を描いた敦煌莫高窟の壁画(88窟・南壁、10世紀)

全集7』上海人民出版社 の上部左は、 シーン。絵の下部では、雇われた息子が馬小屋の掃除をしている。 大きな屋敷で人々にかしずかれる長者(中央)を見て、おそれをなす 物語の3場面を描く。絵の上部右は、困窮した息子(一番上の人物) が 息子に全財産を譲ると語る場面(敦煌研究院提供。『敦煌石窟 立っている長者が部屋の中に座る国王や、親族らに真実

まいます。父親は、

自身の豪勢な生活ぶりが息子を恐

息子を自由にするように命じ

れさせたことを理解し、

No Image

を用いて自分たちの実感を釈尊に伝えます。彼らが

ったのは、ごく若いころ父親のもとから逃げ去り、

他

国で長く暮らすうちに窮乏に陥った男の物語です。

完全な悟りを得ることができると理解した後で、(ユタ) 第四章において、四人の阿羅漢が、彼ら自身も最高(8) をお話しすることから始めたいと思います。 カによる福音書に見られる放蕩息子の譬喩の話 2 「長者窮子の譬喩」と「放蕩息子の譬喩」 法華経に見られる長者窮子の譬喩とル 法華経の 『の要点 譬喩

うと思って逃げ出します。しかし、父親のほうは、 が息子であることがわかり、使いをやって彼を連れ戻 うな裕福な人間は自分には仕事を与えてくれないだろ 福になっていた父親の暮らす地にやってきました。 します。ところが、 その男は、ある日、仕事を求めて、すでに大変に裕 父親を見ても父親であることがわからず、このよ 息子は驚きのあまり気を失ってし 男 男

父親は息子の関心を引くために、うまく変装させた自分が暮らしていけそうな貧しい村に向かいました。ました。召使たちが指示通りにすると、息子は喜んで

召使たちを送り、一緒に働くように息子を誘わせました。その仕事が卑しいものだったので、息子は受け入た。その仕事が卑しいものだったので、息子は受け入た。このようにして父親は、恐れさせずに息子に近づた。このようにして父親は、恐れさせずに息子に近づた。このようにした。時が過ぎるにしたがって、父親は息子にだんだんとより重要な仕事を任せるようになり、本当の息子のように思っていると告げます。年月とともに、信頼関係が築かれていったのです。

さえなかった無量の宝が自分のものとなったことに驚卑しい身分であると思い込んでいます。父親と息子の既で、人々を集め真実をすべて明らかにします。こ関係は、さらに緊密になってゆき、とうとう父親は死関係は、さらに緊密になってゆき、とうとう父親は死関係は、さらに緊密になってゆき、とうとう父親は死の時、息子の心は準備が整っていました。求めることで表しています。

受け入れたのです。 きながらも、この予期せぬ真実を大きな喜びをもって

ルカによる福音書の中で、イエスによって語られる リサイ派や律法学者から蔑まれていた徴税人や罪びと リサイ派や律法学者から蔑まれていた徴税人や罪びと たちを、神がどのように見ているかを教えるために説 かれました。譬え話は、二人の息子をもつ父親が、若 かれました。譬え話は、二人の息子をもつ父親が、若 かから始まります。その若い方の息子は、遠い地へ去 り、その財産を放蕩の限りを尽くしてすべて費やして しまいます。飢饉のために彼の状況はさらに悪化し、 やむなく豚の世話をするようになりますが、豚のほう やむなく豚の世話をするようになりますが、豚のほう が彼よりも良いものを食べているほどでした。

父親は、遠くから息子の姿を認めると、憐れみを覚え分には何も求める資格はないことを知っていました。しても天に対しても罪を犯してしまったことを自覚ししても天に対しても罪を犯してしまったことを自覚した彼は、我に返って、雇われていた人々も十分に食べ彼は、我に返って、雇われていた人々も十分に食べ

やり、 父親は召使たちに命じて、彼に最も美しい服を着せて て駆け寄ります。 ました。 手には指輪をはめてやり、祝宴まで開いてやり 許しを求める息子の言葉も聞かずに、

もわたしと一緒にいる。

わたしのものは全部お前

ように説得する場面で終わります。「子よ、

お前は

宴会をするための子山羊一匹すら与えてくれたことは なかったと。譬え話は、 いたことはなかったのに、父親は自分に、友人たちと 始めました。 年上の息子が畑から戻って、このことを知ると怒り 彼は訴えました。 父親が年上の息子に家に入る 自分は一度も父親に背

No Image

上の息子の返答は知られていません。 楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」。これに対する年 いなくなっていたのに見つかったのだ。 のだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。 祝宴を開いて

類似点と相違点

3

す。またこれらは、ブッダの慈悲と神の万人への愛の さらに重要です。というのも、それらは仏教がどれほ より深く理解させてくれるでしょう。 失敗を重ねても、 点を認識し思索をめぐらすことが不可欠である理 です。そしてこれこそ、対話において、これらの ど根本的にキリスト教と異なるかを教えてくれるから 親が登場することです。しかし相違点は非常に多く、 流浪して困窮に陥る息子と、息子を探す憐れみ深い父 二つの譬え話の明らかな類似点は、 人間がたとえどんな欠点を抱え、 まったく変わらないということを、 家を出て長い間 どれほど 相違 由 で

262×206 cm ンブラント作 「放蕩息子の帰還」 エルミタージュ美術館蔵 の 部 (1668年頃

では、 組み 他 の席で、ごくわずかな人々に対してキリスト自身が語 華経に重みを与えています。一方、 鷲山で多くの重要な説教を行っており、そのことが法 プによって語られます。伝承によればブッダはこの 鷲山に集まった数多くの菩薩や阿羅漢、 っています。このように食事の席を共にすることは、 の存在者の まず相違点の中で、これらの譬え話が語られる〝枠 社会の中で蔑まれている人々も参加できた食事 に注意を向けましょう。 面 前で、 ブッダに対して阿羅 法華経にお ルカによる福音書 神々や様 漢のグル いては、 々 な 1

の象徴を身につけさせ、

帰還を祝う特別な宴を開きま

息子が再び父と一つになる仕方もまた大いに異なった。法華経においては、長者の息子はそれとは知らずに父の住む都市にたどり着きますが、ルカによる福音書では、息子は悲惨な状況に陥った中で、許しを求めるために家に戻ることを決断します。この願いは生存本能によって引き起こされたものではありますが、彼の誠実さはすぐに明らかになります。

明らかになるのです。

ストを非難することをやめませんでした。ファリサイ派と律法学者たちを当惑させ、

彼らはキリ

くにいる息子を見つけると駆け寄って抱きしめ、家族理解して自制します。福音書においては、父はまだ遠いますが、息子にまだその準備ができていないことをす。法華経においては、父親は息子に近づきたいと願息子を見出した時の父親の憐れみの表現も異なりま

る父親にはそのようなことは必要ないことが、すぐにあります。福音書で父と子の関係が直ちに回復されるのは、愛の力はすべてを克服するからです。心を改めのは、愛の力はすべてを克服するからです。心を改めることや許しを乞い願うことは息子には必要であったる父親にはそのようなことは必要な相違点の核心部分でもす。すべてのことが急速に起こります。

うちにできていたのか。この譬え話はこのような問い倒的な歓迎を受け入れる用意が、このような短時間の心ではこの和解をどのように感じていたのか。この圧びすが、いくつか問題が残ります。若い方の息子は内ですが、い

ついても何も語っていません。 の愛は完全に無償であるように思われることです。 には答えてくれませんし、その後の父と息子の関係に 大切な点は、父なる

連 0 間と多くの忍耐が必要です。ここに真に驚嘆すべきブ 能 に対する完全な自覚へと導く父親の、つまりブッダ ダの慈悲を語っています。 て法華経を信じる人々の経験の核心部分に息づくブッ ッ た自覚しかもっていない息子を、 最 の譬え話の中心にあるのも当然のことでしょう。 ダの教えがその姿を見せています。すべてが、 力を描いています。こうしたことにはすべて長い 法華経の譬え話は、 高の智慧を語るとともに、 本当の自分についてごく限ら ですから、この慈悲が、 法華経の核心に、そし 自身の根本的な性質 諸仏 時

方便という観点から見れば、 にすぎないということを説明しているのです。 れた悟り、を超えた尊い られるとき、 それらは結局、 「乗がそれぞれに対する教えと同様に仮⁽²²⁾ 衆生は、 様々な仕方によって、 彼ら自身が想定している ″最高の完全な悟り″ これらの譬喩が巧み 声聞乗と縁覚 救済 0 を得 に用 b 0

b

11

るため になるのです。 の唯一 0) 教え、 すなわち一仏乗に導かれること

清浄になれるようにするためだったのです。 ダの智慧(仏知見)の扉を開き、ブッダの智慧を悟らせ、 ブッダがこの世に出現したのは、すべての衆生にブッ がはじめに言及した、ただ一つの大事な因縁、であり、 に至るのを助けるところにあります。これがまさに私 真に偉大なブッダ の慈悲は、 衆生がこの 最 高

とは、 学者たちが罪びとへの神の愛を信じなかったことに対 する彼の答えがないということが、 るとみなす聖書学者もいます。 年上の息子の存在です。 られているわけです。 つまり神の愛に応答するかどうかは読者・聴衆に委ね 自身の答えを出すように求めているのです! 最後の重要な相違点は、 この譬喩が向けられていたファリサイ派と律法 弟を許さず父親に応答しないこ 彼をこの譬え話の主人公であ 放蕩息子の譬喩に登場する 事実、 読者・聴衆に自分 父親の促しに対 父親に、

それを読んだ

ている理由があります。この譬え話は、

応するでしょう。

ここに、

現代でもこの譬え話が

*生き

受け入れるようにいざない続けているのです。り聴いたりする人に対して、人類への神の絶大な愛を

むすび

広がる対話の領域をいくつか示したいと思います。キリスト教徒がこれらのテクストを知的に読むときにきたものです。ですから、私は結びとして、仏教徒と以上のような考察は、対話の精神によって生まれて

に働くことを可能にしてくれるでしょう。

第一の領域は、

人間の置かれた状況に関するもので

を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 を語ることができるはずです。 とです。 二つの譬 ないを受けています。 これらのテクストについて熟考 ないを受けています。 これらのテクストについて熟考 ないを受けています。 これらのテクストについて熟考 ないを受けています。 これらのテクストについて熟考 ないを受けています。 これらのテクストについて熟考 ないということです。 二つの譬 を語ることができるはずです。

きる可能性に関するものです。どちらの譬え話も〝人第二の領域は、誰もが本当の自分を見出すことがで

た人々と福音書に啓発された人々が平和に向かって共の様相を示す現代の世界にあって、法華経に啓発されいます。この希望は、ときに破壊的なまでの精神疲労ぞれの仕方で、そこから抜け出る方途を示してくれて人である。とは語っていません。それどころか、それ人である。

身についての完全な自覚へと向かう緩やかな進歩に焦 です。この領域は、 大変に狭いものと思われてしまうかもしれません。 点を当てていると思われる法華経の譬喩を比べるとき、 まり恩寵として語る放蕩息子の譬喩と、 たされない状況から人類が抜け出す方途に関わるもの っていくのです。 かし、この領域は、 「自ずから」という言葉に光を当てるとき、確実に広が 第三の、そしてとても重要な対話の領 法華経に繰り返し現れる「自然に」 神の絶大な愛を贈り物として、 本来の自分自 域 は、 この 満

何者であるか〟を父から知らされ、無量の宝を得た息この点において、法華経の譬え話の最後で〝自分が

た囚

間は生まれながらにして不満足な状況にとらわれ

と〝恩寵〞が同じであるなどと想像しようというので が、自ずから得るところとなりました」。、自ずから 子の心境は大変に興味深いものです。「わたしには、は 分にある、悟りや救済を得るには何をするべきか計算 はありません。ただ、自ずから、と、恩寵、の核心部 わたしたちは、以前に望んだこともありませんでした したちは、今日、これまでになかったことを得ました。 羅漢たちの説明でも同じ言葉が使われています。「わた 蔵のほうが自然にやってきた」。この譬え話を説いた阿 じめから求めようという心もなかった。今、この宝 いのです。 などしなかったことの重要性〞について熟考してみた

えばよいのかという問いです。答えは簡単です! 対話のこれらの領域の中で、 うひとつ別の問いに答えなければなりません。それは、 もたくさんありますが、残念ながらここで終わらなけ れはちょっと水泳に似ています。対話の仕方を学ぶに ればなりません。しかしながら、話を終える前に、 対話には、これから見出すべき興味深い領域が他に 私たちはどのように振舞 そ

> は……対話をすればよいのです! そして、行き詰ま 対話しているとき、私たちは孤独ではないと。 ったときには、こう思い出しさえすればよいのです。

ご清聴ありがとうございました。

注

 $\widehat{2}$

- (1) それぞれの譬え話は、法華経の第4章 カによる福音書」の第15章に見られる。
- 『妙法蓮華経並開結』、創価学会、2002年、 三文明社、1978年、 大幅に改変した。 - 121頁。三枝充悳訳『法華経 現代語訳(全)』第 61-62頁。(訳注) 三枝訳を 1 1 9
- 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、208頁/477頁。 二枝訳 (前掲)、142/369頁

3

- (訳注)福音書からの引用は『聖書 新共同訳 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、482頁。 三枝訳 372頁。(訳注)三枝訳を大幅に改変した。 (前掲)、 日本聖
- 「マタイによる福音書」13:13 15

書協会、1987年による。

6

5

 $\widehat{4}$

- $\widehat{7}$ 13 34 35
- 「種を蒔く人」「ともし火と秤」「成長する種」「からし

- 9 「マルコによる福音書」4:33-34。
- $\widehat{10}$ この問題においては維摩詰の雷の如き沈黙に言及しな とばも説かず、無語、無言、無説、無表示であり、 ころは、それもまたすべて二なのである。なんらのこ はすべてよろしいが、しかし、あなたがたの説いたと 身の見解を披露する。「高貴な人よ、あなたがたの説 不二についての自身の見解を述べた後、文殊菩薩が自 は維摩経に説かれる不二をめぐる問答の中に見られ ければならない。仏教の世界で有名なこの〝霊的対決 多くの菩薩(悟りを得ることを誓った者)たちが
- 仏典7 維摩経·首楞厳三昧経』中央公論新社、 文字もなく、ことばもなく、心がはたらくこともない」。 これこそ菩薩が不二にはいることであって、そこには をたたえて言った。「大いに結構です。良家の子よ、 維摩詰は何も言わなかった。すると文殊菩薩は維摩詰 、訳注) 邦訳に際しては長尾雅人・丹治昭義訳『大乗 138頁を参照した。 200

とです」。続いて文殊菩薩が維摩詰に見解を求めると、 かないということも言わない、これが不二にはいるこ

- 11 and other Indian issues), Roger-Pol Droit, Hermann Editeurs autres questions indiennes (The Silence of the Buddha 例えば以下の文献がある。Le silence du Bouddha:ei
- 12 譬え話の機能の分析については以下の文献を参照。 paraboles du Royaume: Jésus et le rôle des paraboles dans

- Sullivan, dans la collection « Lire la Bible », Editons du la tradition synoptique (Parables of the Kingdom: Jesus and Cerf, 2010, p. 9-32 the Use of Parables in the Synoptic Tradition), M.A. Getty.
- (訳注) イエスが、 髻中明珠の譬喩、 良医病子の譬喩である。 弟子ペトロ、ヨハネ、 ヤコブを連

14

 $\widehat{13}$

七つの譬喩とは、三車火宅の譬喩、

三草二木の譬喩、

化城宝処の譬喩、

衣裏繋珠の譬喩 長者窮子の

) 譬喩、

- コによる福音書9章、 の変容」と呼ばれる。マタイによる福音書17章、マル ながら、 れて高い山に登り、そこでモーセとエリヤと語り合 白く輝く姿を弟子たちに示した。「主イエス ルカによる福音書9章に説かれ
- 「マタイによる福音書」17 .. 9 °
- 16 15 謎としての譬え話については、 前掲 (注12) 文献の52

頁を参照。

- 17 (訳注) 第2章・方便品に説かれる「五千起去 上慢)」のエピソード。 五千
- 18 ための修行をすべて終えた者を指し、、尊敬を受ける 阿羅漢とは、初期、仏教の枠組みの中で、 に値する者〟という意味 悟りを得る
- 19 聞き、自分たちにも最高の完全な悟りを得る可能性が 四人の阿羅漢、 あるというブッダの教えを理解した。 目揵連は、法華経第3章で説かれた三車火宅の譬喩を 須菩提、摩訶迦栴延、 摩訶迦葉、 摩訶

- Claude Tassin, Jacques Hervieux, Hugues Cousin and Alain 2001, p. 733 Marchadour, Les Evangiles : textes et commentaires (The Gospels: Texts and Commentaries), Bayard Compact
- 「ルカによる福音書」15:31-32。

22 $\widehat{21}$

小乗、大乗、金剛乗と混同してはならない。 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、 120-121頁。

三

(前掲)、61-62頁。

『妙法蓮華経並開結』 (注 20 文献、734頁 (前掲)、221頁。

25 $\widehat{24}$

 $\hat{26}$

「妙法蓮華経並開結」

(前掲)、235頁

長を務めた。退職後も、フランスのカトリック系大学 パリ・カトリック学院にある科学と神学研究所の副所 982年)を取得。1988年から2007年まで、 くに仏教について学んだ。1977年、家族とともに 年を日本で過ごし、日本語や日本文化、日本の宗教と Dennis Gira /パリ・カトリック学院元教授。1943 かキリストか』(サン パウロ社、2005年) も発刊 同テーマを扱った出版書籍は多数ある。邦訳 教や宗教間対話に関する講座を引き続き行っている。 (Ecole pratique des hautes études) からディプロマ(1 ジア学の博士号(1981年)と、高等研究実践学院 フランスへ渡り、 (リヨン、パリ、 シカゴ出身。 アンジェ)や国内のセミナーで、仏 1969年から1977年までの8 研究を続け、パリ第7大学から東ア _ ブッダ

(訳・やぎぬま まさひろ/東洋哲学研究所研究員